

---

 書 評
 

---

Osamu KONDO, *The Early Modern Monarchism in Mughal India, with a Bibliographical Survey*

小 名 康 之

はじめに、著者は従来のインド史の時代区分、古代、中世、近代において、ムガル朝時代を中世とおくことへ疑問を呈している。改めて時代区分を古代、中世、近世、近代、現代として、ムガル朝時代を近世 early modern におくことを提案している。その上で、本書の主要な論点を近世のムガル朝の君主論としている。

本書の多くの章は、すでに発表されたものが多く、初出の雑誌名を挙げている。とくに同著『ムガル朝インド史の研究』（東洋史研究叢刊之六十一、京都大学学術出版会 2003）の各章と重複するものが多い。

ここでは、英文の独立した著書であるので、あらためて、内容の紹介からはじめる。なお、ここに出てくる専門用語の訳語は、日本語表記を統一するため、著者がすでに公表している論文、著書に使われている日本語の用語をそのまま使用し、まとめるにあたって、『ムガル朝インド史の研究』を多く参照したことをあらかじめことわっておく。

「序章」「ムガル・インド史の最近の研究 Recent Studies of Mughal Indian History」では、最近の「ムガル朝史」研究を取り上げている。第一に上げているのは、1987 年から刊行が始まった「新ケンブリッジ・インド史」である。その第 1 グループに「ムガル朝および同時代史」がある。

以下、ムガル帝国確立のアクバル時代研究、土地制度史、政治史に関する研究書を取り上げ、ムガル朝時代研究に大きな影響を与えたイルファン・ハビー

ブの土地制度史研究、その改訂版、および「歴史地図帳」にふれ、さらにムガル朝時代の貴族層の研究、ムガル朝時代の概説書などを紹介している。

著者は、経済史研究をはじめ、都市史、地方史、技術史、宗教史の分野、歴史理論、封建制論争、国家論の研究を取り上げ、文化史としては、建築史、絵画史を取り上げている。最後に、本書の各章で取り扱っている内容を詳しく要約しているので、本書全体の著者の構想を理解するうえで大いに参考になる。

第1章は、「アクバル時代のインド地理観 Geographical Image of India at the Time of Akbar」であり、はじめにビールーニー al-Bīrūnī『インド誌 Kitāb al-Hind』の記述を引用してインドの地理的状况を取り上げている。

つぎに、アブル・ファズル Abu'l-Faẓl の『アクバル会典 Ā'in-i Akbarī』第3部「国土 mulk-ābādī」からインドの地理を取り上げ、さらに、同書第4部「ヒンドゥースターン事情 aḥwāl-i Hindūstān」を取り上げて、その中からインドの地理について特徴を上げている。

とくに、インド人の敬虔深さ、ヒンドゥー教の特徴を取り上げ、神像礼拝はイスラーム教で禁じられている偶像崇拜にあたらないこと、ヒンドゥー教徒の太陽を崇める風習、ヒンドゥー教の三神についての記述や、ヒンドゥー社会の閉鎖性の記述にふれ、『バーブル・ナーマ Bābur-nāma』でふれられていたインドのマイナス面はアクバル時代に克服されたという『アクバル会典』の記述を紹介している。

さらに、第3部の中の後半部「12州の事情 aḥwāl-i davāzda šūba」を紹介し、とくにアブル・ファズルの記述の中でムガル皇帝の理想的皇帝像を取り上げ、こうした記述をもとに、著者は、アクバルを近世的独裁君主 early-modern absolute monarch である、としている。このアブル・ファズルの皇帝観は、つぎの第2章でさらに展開していく。

第2章、「アブル・ファズルの皇帝観 Abu'l-Faẓl's Conception of Kingship」では、アブル・ファズルのムガル朝皇帝の独裁君主論を説明している。著者は、アブル・ファズルの『アクバル会典』の、人々の「嚮導者 ā'in-i rah-namūnī」の条に関して、ペルシャ語文をもとに検討している。

アブル・ファズルの、アクバルを最高の権威者とする新しい宗教組織 silsila

について、同時代の歴史家で、アブル・ファズルの批判者であるバダーウニーはこの思想を「タウヒーディー・イラーヒー tauhīd-i ilāhī」と呼んだとしている。

つぎに、『アクバル会典』の記述の中から、皇帝を意味するパードシャー pādshāh の語の意味について、アブル・ファズルによる説明を紹介している。ここから、アブル・ファズルのいう皇帝は、新妻たる世界が敬愛し崇拝する新郎のようなもので、ヒンドゥー教の伝統的な夫婦観 a traditional view of an Indian marriage according to the Hindu faith に基づいたものだとする。

さらに、アクバル・ナーマの関連箇所をペルシャ語から英訳して、アブル・ファズルの皇帝観を説明していく。アブル・ファズルの皇帝観を、皇帝は精神世界 guiding leader of the spiritual world と現実世界の嚮導者 guiding leader of the secular world であり、人々の間に普遍的和解 sulḥ-i kull をもたらすものであること、一君万民的思想 the sole monarch for all people の一面を示していることを紹介していく。

その皇帝観は、皇帝は神からの賜物、時代の精神 mizāj-i rozgār であり、「先見の明ある知性」、「寛大な度量」などアクバル自身がつつ皇帝としての資質をあげ、皇帝は世界の番人 jahānbān であること、としてまとめている。

おわりに、アブル・ファズルの父、シェイフ・ムバーラク Shaikh Mubārak が起草した 1579 年の「マフザル maḥẓar (宣言)」を取り上げ、この「宣言」の内容は、アクバルに、ムジュタヒド mujtahid よりも高い宗教権威を与え、カリフの地位を認めたものであると、説明している。

さらにジャローカ制 jharokha (アクバルが宮殿の窓から人々の遥拝を受ける儀式)を取り上げ、アブル・ファズルの皇帝観はインド近世の典型的な独裁的君主観 a typical absolute monarch of early modern India であると述べている。

第 3 章は、「ムガル宮廷文書を主とするアクバル治下の文書 Diplomats under Akbar with Special Reference to Mughal Royal Edicts」である。はじめに、ムガル朝のアクバル時代の支配方式を文書主義 a documentation principle の社会であり、「文書統治 paper government」による国家であるとしている。

ムガル支配体制を皇室管財長官 mīr-sāmān, 軍隊監察長官 mīr-bakhshī, 財

務長官 *diwān-i kull*, 司法長官 *ṣadr al-ṣudūr* の 4 長官体制だとして、『アクバル会典』の証書発給の条 *ā'in-i sarānjām-i asnād* を紹介し、ムガル朝の公文書を説明し、皇室発給文書 *royal edicts* と官庁発給文書 *official rescripts* があることを述べている。

ここでは、もっとも重要な「宮廷文書」であるファルマーン（勅令）*farmān* の発給手順を、『アクバル会典』の第 2 部のファルマーン関係の条から解説している。すなわち、第 1 段階の勅令の草案 *yād dāsht* 作成、第 2 段階の能筆家 *expert of penmanship* による書面の作成、最後の勅令正文の作成、皇帝の玉璽へと続くとしている。

ファルマーンには、登記勅令 *farmān-i ṣabtī* と白地勅令 *farmān-i bayāzī* があり、通常はほとんどが登記勅令であるという。登記勅令の発給の対象は、第 1 は宰相、州総督、皇子後見、財務長官などの任命、第 2 は領地 *jāgīr* 授与、征服地の管轄、第 3 は恩賞地 *madad-i ma'āsh*, *suyūrghāl* 授与であることを述べている。

通常ファルマーン形式については、その最上部に頭書 *sar-nāma*, つぎに花押 *tughrā*, 玉璽 *muhr* とつづき、ファルマーン本文が書かれ、本文末尾に発給日、裏面に、裏書 *ẓimn*, 関係役人の署名捺印が続くことを説明していく。

最後に、ファルマーンの実例として、シャージャハーン *Shāhjahān* 時代のもの 1 通、アウラングゼーブ *Aurangzeb* 時代のもの 2 通を紹介している。そのうち、1684 年発給のアウラングゼーブのものについては、実物の縮小写真版が掲載されているので、これによって、なかなかなじみのないファルマーンの実物がどういうものであったのか、おおよその見当がつく。

第 4 章は「ムガル・インドにおける宗教と文化 *Religion and Culture in Mughal India*」で、はじめに、バックラー *F.W. Buckler* の 1922 年の論文「インド反乱の政治理論 *The Political Theory of the Indian Mutiny*」を紹介している。近年、議論が高まってきた、アクバル時代に関するシンポジウム、「アクバルとその時代」にふれている。

本書では、バダーウーニーの歴史書に掲載されているペルシャ語本文を挙げて、「マフザル」そのものを解説している。これはアクバル時代の最高の法学

者たちが署名したものであるが、バダーウーニーによれば、本書の先の章でふれたように、アブル・ファズルの父、シャイフ・ムバーラクが起草したものである、という。

「マフザル」の中では、アクバルに対して、カリフを意味する用語 *sulṭān-i ‘ādil, amīr al-mu’minīn* が使われている。「マフザル」の結論は、アクバルがムジュタヒド *mujtahid* より高い権威をもつカリフの地位にあること、ムジュタヒドたちの間で意見の相違があった場合、アクバルが最終的な決定を下す権限をもつこと、アクバルが経典の文言 *naṣṣ* に反しない限り宗教上の命令 *fatwā* を発することができる、というものであった、という。

さらに、この「マフザル」が対外的には、サファヴィー朝、オスマン朝、ウズベク勢力に対して、自らの権威の独自性を主張したものであるという、バックラーの説を紹介している。

「マフザル」の出されたあとすぐに、ベンガル、ビハールでアクバル支配に対する大反乱がおこり、アクバルの異母弟ミールザー・ムハンマド・ハキーム *Mīrzā Muḥammad Ḥakīm* がこの反乱に乗じて西インドへ侵入を開始するなどしたため、この反乱によってアクバル支配が重大な局面に立たされたという。この「マフザル」につながる一連の政治的事件を述べている。

1581年、アクバルは、イブヌル・アラビー *Ibn al-‘Arabī* の汎神論的、神秘主義思想の強い影響を受け、普遍的和解 *ṣulḥ-i kull* の信条に傾倒するようになったという。1582年ごろ、一種のスーフィーである新しいグループ *silsila* の結成があきらかとなった。

その信条は、ゾロアスター教やヒンドゥー教の影響を受けていたことを説明している。はじめ、このグループへの信奉を希望する者は多数に上った。しかし、その後、その数が増大していったことを示す兆候はなかったという。

アクバル時代後半になると、イスラーム千年王国運動が高まってきたこと、皇子サリーム *Salīm* の反乱やアブル・ファズルの暗殺などが続いた。ムガル時代のインド・イスラームの2つの潮流のうち、正統派イスラームを主張する流れが高まり、とくに第2千年紀のイスラームの改革者 *mujaddid-i alf-i sānī* と呼ばれるシャイフ・アフマド・シルヒンディー *Shaikh Aḥmad Sirhindī* が、アク

バル時代の融和主義、折衷主義を激しく批判した。

ムガル朝では、シャー・ジャハーンの長男ダーラーが、ヒンドゥー主義とイスラームとの共通の要素を見出そうとして著作 *Majma' al-Bahrain* を著した。アウラングゼーブは、正統主義の流れをとり、王位継承戦争でダーラーを破り、処刑した。アウラングゼーブの厳格な正統主義思想のうちにムスリム分離主義 *separatism* の方向が見られる、という。

最後にインド・イスラーム文化の特色に触れ、インド文化では、ヒンドゥー文化とイスラーム文化の融合主義的文化が発達し、建築、墓廟建設、ウルドゥー語の発展などの面に見られるとしている。

第5章「アフマダーバードのジャイナ教徒豪商とムガル権力 *A Wealthy Jain Merchant of Ahmadabad and the Mughal Authorities*」では、シャーンティダース・ジャワーハリ *Shāntidās Jawāhari* とムガル権力との関係を取り上げている。コミッサリアートの論文にある文書を分析して、シャーンティダースの活動を追っている。

シャー・ジャハーン時代に起きたかれに関わる大きな事件は、かれが寄進して建てたジャイナ教寺院の、モスクへの改修問題であった。のちにこの寺院をシャーンティダースへ返還するという命令書が出されたが、寺院は荒廃が進んでしまったという。

皇位継承戦争中、4男のモラードへの融資は返済されなかったが、その後、シャーンティダースはアウラングゼーブ側に融資し、モラードへの融資金の一部が返済された。ここでは、アウラングゼーブの勅令を分析している。

アウラングゼーブ時代には、シャーンティダースは、イギリス東インド会社への多額の融資をおこない、アウラングゼーブへも多大な援助をおこなったという。

ジャイナ教徒に対してとったムガル朝の宗教政策を、ジャイナ教徒の信仰の自由を保証すること、ジャイナ教徒に対してムガル帝国永続のための祈禱を期待すること、ジャイナ教徒間の紛議に介入しないこと、というものであったとしている。

おわりに、アフマダーバードのナガルセート *nagarseth* としてのシャーン

ティダースの役割を、ムガル朝の最重要州のひとつであり非常に経済的に発展していたこの都市において、商人ギルドとムガル朝政府との仲介者の役割を果たしていた、としている。

第6章「ムガル・インドにおける商工業、特にグジャラート地方にふれて Commerce and Industry in Mughal India, with Special Reference to Gujarat」では、インドの都市において手工業生産が発達しており、インド経済が当時のヨーロッパより発達していたという説を紹介している。

インドを訪れたヨーロッパ人の記録によってムガル時代の市場 *nakhās* にふれ、ムガル時代の地租の現金納入、貨幣経済の進展、両替商 *ṣarrāf* の活動、遠隔地送金、手形発行 *hundī* など、信用制度が発達していたことなどにふれている。

さらに、スーラト、マスリパタム、フーグリーなど海港都市、パトナ、アーグラなどの内陸都市や、バヤーナ、サルケージュ、ダッカなど、特定輸出品の生産地にふれている。

グジャラート地方の繊維生産 *textile industry* を説明している。商工業生産方式として自営職人制 *independent artisan system* とカールハーナ制 *kārkhāna system*（一種の共同作業制度）の2種類の生産形態を上げている。

ムガル時代の最も重要な海港都市としてのスーラトを取り上げている。ここにはヒンドゥー・バニヤー商人、ボーラ商人 *bohra*、パールスィー商人、ジャイナ教徒商人などの豪商が多数居住していた。

おわりに、ムガル時代にこれほど高度発展した商工業生産がなぜより高度な技術的、社会的発展につながらなかったのか、という疑問を提出している。これに対して、ムガル時代の経済発展に関する諸説を紹介し、従来の有力な説によれば、ムガル時代の商業発展がムガル体制の限界を超えていくことにはならなかったとしている。

この点で、著者は、マルクスの『資本論』第3巻20章の有名なテーゼを引用している。しかし、今後のよりいっそうの実証研究を深めていく努力が必要であるとして、現段階では、ムガル時代の経済発展に関してこれ以上結論を出すことには慎重である。

第7章「ムガル帝国時代の日本とインド洋 Japan and the Indian Ocean at the Time of the Mughal Empire」。この章では、ムガル時代の日本とインドとの交流を論じている。

東南アジアにおいては、早くから、西インド海岸のグジャラート商人がジャワに來航し、交易を行っていた。ポルトガル人のマラッカ占領後、グジャラート商人はマラッカを撤退し、スマトラ先端のアチン Achin に拠点をうつした。

17世紀になって、イギリス、オランダが東南アジアに進出後もグジャラート商人はアチンに來航し、日本とインドとの交易を仲介していた、という。

付録の第1章では、現在の「インド封建制論 The Feudal Social Formation in Indian History」にふれている。マルクスのインド論にふれて、インド封建制論を検討している。

付録の第2章では、研究者のための文献案内をつけている。今後のムガル・インド史研究において、こうした網羅的な適切な文献案内は、たいへん有効なものである。

以上でわかるように、ムガル朝の皇帝支配を論じる主要な部分は本書の第1章から第4章で、直接にはアクバルの皇帝支配に関わる部分である。本書では、ムガル時代の文書の実例として挙げているファルマーンはシャージャハーン時代のものと、アウラングゼーブ時代のものであるが、その形式が確立されたのはやはりアクバル時代である。

本書を通読して第一に感じるのは、英文がわかりやすく、読みやすいことである。本書では、まず、第2章「アブル・ファズルの皇帝観」で、アブル・ファズルが編纂した『アクバル・ナーマ』と『アクバル会典』からアブル・ファズル自身の文章や用語を取り出し、かれの皇帝観を正確に要約している。本書の説明は非常に明快であり、たいへん理解しやすい。

本書は、著者がムガル時代の一次史料を基にして研究してきた成果である。ムガル時代史研究は、従来、ヨーロッパ東インド会社史料や資料集『アクバル会典』を除けば、ムガル朝の一次史料そのものを使って行う研究が少なかった。

従来は、本書で取り上げられているファルマーンなどの一次史料に基づく研究は必ずしも十分ではなかった。本書は、第2章、3章で、『アクバル会典』、



『アクバル・ナーマ』などの史料をペルシャ語文献によって検討しており、第3章ではファルマーン原文をみて、その様式をはじめ、内容について研究を進めている。

第4章では、バダーウニーの歴史書に引用されているものではあるが、「マフザル」の原文そのものを検討している。さらに、第5章で、シャーンティダースに関するペルシャ語史料そのものを研究している。本書は、そうした第一次史料に基づく研究方法による研究成果である。

ここでは、本書の中心課題であるインド近世の皇帝支配の思想にしぼって、あえて誤解をおそれずに疑問点を出してみたい。アブル・ファズルの皇帝観、すなわち本書第2章でまとめられているムガル朝の近世的独裁皇帝観にもっとも深く関連するのが「マフザル」の内容であることは明白である。第4章の「ムガル時代の宗教と文化」の中の、「マフザル」の考察において具体的にその皇帝論が論じられている。

この「マフザル」は、歴史的にその発布の年月日や起草者が明確であり、「マフザル」のペルシャ語原文も同時代の歴史書に引用された形ではあれ、残っており、「マフザル」発布前後の政治的状況も比較的あきらかにすることができる。

当時、広く一般に皇帝の権威を具体的に示したアクバル時代の文書は、第一に高級官僚や武将へ向け発布されたファルマーンである。これとならんで、あるいはそれ以上に皇帝の権威を具体的に示し、後世まで残る文書が「マフザル」である。

アブル・ファズルは、かれが編纂した『アクバル会典』、『アクバル・ナーマ』の中で自らの皇帝観を述べ、アクバルの皇帝としての権威を高めるために、その考えを表明した。かれの思想の延長上で、「マフザル」(1579年9月)は、まさに、アクバルを宗教上の最高権威者におくことを高らかに、公けにした決定的な現実の宣言のはずである。これはかれの編著の中での記述にとどまっていたものではない。

問題は、第一に、アブル・ファズルは自らの皇帝観ともっとも深く関連するはずの「マフザル」を、その編著においてなぜ掲載しなかったのか。アブル・

ファズルは、「マフザル」そのものにまったく言及しなかったのかどうか。

アブル・ファズルの膨大な書簡集は、十分に研究されていないので、アブル・ファズル自身が「マフザル」にまったくふれなかったのかどうか、この点はまだ断定できない。しかし、本書はこのことにふれていない。

第二に、第一の疑問と重なるが、従来の研究ですでにいわれてきたように、アブル・ファズルが「マフザル」の内容にその論著でまったくふれなかったというなら、「マフザル」の内容とアブル・ファズルの皇帝観に関する記述とがどのようにつながっていたのか、大きな疑問点である。「マフザル」の内容やその発布の背景的、政治的状況は、アブル・ファズルの最大の論敵、正統派スンニを自称するバダーウーニーの論著によって明らかになるだけに、やはり、この点は気になるところである。

「マフザル」は、アクバルをカリフと等しい地位にあると宣言したもので、ということであるから、あきらかに、アクバルがムガル朝におけるスンニの宗教界における最高の地位にあることを表明したことになる。アブル・ファズルの皇帝観によれば、アクバルが現実世界の「嚮導者」であるとは、さきの章で著者が丁寧にまとめたことから明らかである。

「マフザル」によってアクバルが宗教界の最高権威者と認められまさに聖俗両界の最高の権威者であり、アクバルのいわば完成された姿の宣言になるはずである。これが、本書の近世的独裁君主論の結論であると、読者は読み取ってよいのであろうか。それならば、アブル・ファズル自身がその論著の中で高らかにこのことをなぜ広言しなかったのか、という素朴な疑問がわくのである。

第三の問題として、「マフザル」はムガル帝国全土にどのように伝達されたのであろうか。本書では引用されていないが、アブル・ファズルとバダーウーニーとの、やや中間的な思想的立場をとると見られるニザームッディーン・アフマド Nizām al-Dīn Aḥmad がその歴史書 “Ṭabaqāt-i Akbarī” に、やはり、「マフザル」を掲載している。

ニザームッディーンの方は、バダーウーニーの文章と一部をのぞいてほとんど同じである。これはすでに知られていることであるから、「マフザル」は、当時、ムガル帝国領内に広く伝えられたとみていいであろう。

「マフザル」の約3か月前に、ファテプリ・シークリーで、アブル・ファズルの長兄が起草したといわれるフトゥバを、アクバル自身が読み上げるつもりであった、という (p.57)。フトゥバはモスクで読み上げる説教で、皇帝が読み上げることによって、自らがカリフの地位にあることの表明であると、見られてきた。

「マフザル」もやはりムガル朝全土のモスクで読み上げられ、一般に伝えられたものであろうか。本書ではフトゥバにあまりふれていないが、『アクバル・ナーマ』ではフトゥバについて叙述しているアブル・ファズルがなぜか「マフザル」にはふれていない。

さらに、第四の問題は、この後、「マフザル」で宣言された決定に基づいて、アクバルが実際にイスラーム法にかかわる問題に何らかの決定を下したのだろうか、という点にある。この「マフザル」が、アクバルがムジュタヒドより上の地位にあることを認めたことから、これはスンニ的結論である。

このスンニ的結論は、ムガル朝の代々の皇帝のスンニ的宗派を受け継いだ、とみていいだろうか。このことは先に著者がふれたアクバルを中心とするスーフィー的組織 silsila の思想とは直ちに矛盾するものではないと思われる。

しかし、これも従来の研究ですでにいわれてきたことであるが、「マフザル」の論理は現実にはどれほどの有効性を持ったのかとなると、疑問が多い。なるほど、「マフザル」がアクバルを強力な独裁君主としての権威を高める上で最善の宣言となったであろうことは十分に予想できる。それにもかかわらず、「マフザル」の有効性を疑問としてあげるのは、アクバルは十分に読み書きができなかったと、当時、いわれていたからである。

このことが広まっていたとすると、アブル・ファズル自身は、その論著において、それを打ち消すようなアクバルの能力を証明する事実を記述したのであろうか。アブル・ファズルの皇帝観では、皇帝の権威は神から与えられたものであるから (p.59)、アクバルの持つ権威には、「マフザル」によって認められた現実の能力はすでにふくまれている、ということであろうか。

しかし、アクバルにはイスラーム法の論争を決定するだけの能力がない、ましてヤカリフたるにふさわしいイスラームの学識に欠けていたと、当時、みな

されていたとしたら、アブル・ファズルは、その判断にどのように答えたのであろうか。

皇帝の権威が神から与えられたというだけでは不十分ではないだろうか。「マフザル」は具体的な宣言文書であるから、アブル・ファズルは、イスラーム法に関わる何か具体的な事件の解決によってアクバルの能力を証明する必要があったのではないだろうか。

また、やや気になる第五の疑問点は、Allāhu Akbar の語についてである。この語句の使用から、ただちに特定の皇帝崇拝（この場合はアクバル崇拝）につながるのかどうかということである。本書の第二章、ジャローカ制の説明で、Allāhu Akbar なる語の唱和が皇帝崇拝につながり、王権を高めるために意図された、としている (p.62)。しかし、第三章に引用されたファルマーンの実例には、シャージャハーンのパルマーンの頭書にこの用語がつかわれている (p.84)。

皇帝名で出されるファルマーンの頭書は、その勅令の権威を裏付ける象徴的用語ではないだろうか。確かに、アクバル時代のファルマーンには Allāhu Akbar の用語が使われており、これがしだいに皇帝の代を経るごとにコーランの開巻最初の語に置き換わっていったとみられる。

アブル・ファズルの論著のはじまりはたしかに Allāhu Akbar ではじまる。アウラングゼーブの初期 10 年の歴史書、『アーラムギール・ナーマ Ālamgīr-nāma』のはじまりはコーランの開巻最初の用語である。しかし、アウラングゼーブの王子時代の初期の命令書、あるいは、統治初期のかれの命令書などは、その頭書にはどのような語句が用いられていたのだろうか。

ファルマーンやニシャーンなどは実際にみて検討できるものの多くは写しであって、原文の全文ではなく、頭書などは省かれている。多くのファルマーンの完全なる様式を現物（本書の写真版）によって確かめることは困難である。

しかし、ファルマーンはまさに「マフザル」と同等の権威ある命令書である。こうした公けの重要文書に Allāhu Akbar の用語がつかわれている例がある以上、この語の使用が特定の皇帝崇拝につながるとみてよいのだろうか。

第六に、バックラー説についてふれることはやや本書の範囲をこえているか

もしれないが、「マフザル」の主たる内容は国際関係にあるとする見方に、やはり、疑問が残るのではないか。そもそも、この「マフザル」はオスマン朝やサファヴィー朝の支配者にどのような形で伝えられたのだろうか。

当時、ムガル朝とオスマン朝は、ムガル朝皇族、貴族のメッカ巡礼で相互の交渉があったことが知られている。サファヴィー朝に対しては、皇帝の書簡の形で双方の意思伝達があったことはよく知られている。はたして、「マフザル」の内容を伝えた文書がオスマン朝やサファヴィー朝に届けられ、その内容にふれた皇帝書簡が残っているかどうか。

最後に、やや、本書の範囲を超えていると思われるので、疑問というより、今後の研究へ期待を述べてみたい。アブル・ファズルのムガル朝における行動と思想の政治的背景についての研究が、必ずしも十分でないようである。

父シャイフ・ムバーラクは、正統派ムスリムの学者から16世紀初めごろのシーア的なマフダヴィー運動に関わったとして疑われ、迫害を受けたとされている。読者としては、かれをめぐる政治的背景とアブル・ファズルの皇帝観に関わる思想との関連がもっと明らかになることを期待している。

本書はアクバルの皇帝支配を中心にして論じているので、その点で、アブル・ファズルの皇帝観に最も関連するとみられる「マフザル」に関わる疑問点を中心にしてあげてみた。

ここであげてみたいいくつかの疑問点は本書の欠点ではなく、本書が、日本人による英文による本格的なムガル朝研究書であり、インド、欧米での同時代研究と比較して、非常に質の高い優れた研究書であることはあきらかである。

March, 2012 Kyoto Shoukadoh Book Sellers

22 cm 7+327+6 p 9,000 yen+tax.